

I P M実践指標モデル (カンキツ)

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
予防	圃場及び樹体の管理	1) 適正な栽植密度を維持することにより、圃地の通風・採光・乾燥を良くして、病害が発生しにくい環境を作る。	適正な栽植密度は薬剤付着を良好にする。	
		2) 適正な剪定を実施することで、混み合った枝は切り取って風通しを良くして、カイガラムシ類、コナジラミ類の発生を助長しないようにする。また、黒点病、かいよう病、そうか病による被害枝を剪除する。		
		3) 生育期間中は新梢管理を適正に行い、各種病害の発生を予防する。		
		4) 6~8月の間、主幹地際部及び周辺雑草を除草し、ゴマダラカミキリによる産卵行動を抑制する。		
	雑草対策	5) 各種の資材や枯死雑草によるマルチ及び機械除草等による除草剤を使用しない雑草管理対策を実施する。	雑草などを利用した草生栽培は雑草管理の省力化のほか、天敵昆虫の温存効果がある。	
	耕種的・物理的防除技術の導入	6) かいよう病等の発生を抑制するため、防風ネット設置などの対策を施し、強風等による傷の発生を防止する。		
		7) 褐色腐敗病対策として、マルチや敷わらを行ったり、枝吊りにより果実を地表より離す。		
		8) (施設栽培)アザミウマ類対策として、光反射資材を設置することで侵入を防止し、果実被害を軽減する。		
		9) 果樹カメムシ類及び果実吸蛾類対策として、黄色灯の夜間点灯による圃地への飛来忌避及び被害軽減を図る。		
		10) 果樹カメムシ類対策として、光反射シートマルチの使用による果実被害軽減を図る。		
		11) チャノキイロアザミウマ対策として、炭酸カルシウム水和剤による果実被害軽減を図る。		
判断		防除の要否の判断・病害虫発生予察情報の確認	12) 定期的に圃内を見回り、各種病害虫の発生状況を確認する。	
	13) 黒点病対策は、薬剤散布後の累積降雨量(250~300mm)を次回散布の目安にする。			
	14) かいよう病対策は、天気予報に注意し、強風豪雨が予想されるときは、予防散布を実施する。		台風等の接近が予想される場合は、事前に散布すること。	
	15) ミカンハダニ対策は、葉1枚当たり、1頭以上確認された場合、防除を行う。			
	16) ミカンサビダニ対策は、春葉に寄生が確認された場合、殺ダニ剤を散布する。	春葉展葉後、裏面にある褐色の食害痕を確認する。		
	17) 生育ステージや気象に応じた防除を実施するため、病害虫防除所が発表する発生予察情報等を入手確認する。	病害虫防除所のホームページアドレス http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo		
	耕種的・物理的防除技術の導入	18) ゴマダラカミキリ対策として、成虫を見つけたら捕殺する。また、樹幹部から虫糞が排出されている場合には、針金で坑道内の幼虫を突き刺す。		
生物的防除技術の導入	19) ゴマダラカミキリ成虫対策として、昆虫病原糸状菌製剤を成虫発生初期に圃内に施用する。	産卵前に死亡させるように、成虫羽化開始時期に枝幹部に取り付け感染させる。		
防除	農薬の効果的な利用	20) ハダニ類、カイガラムシ類対策として、収穫期以降~新梢発生期は合成殺虫・殺ダニを使用せず、冬期マシン油により防除する。		
		21) 農薬を散布する場合には土着天敵に影響の小さい選択性薬剤を選択する。		
		22) 当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。		
	ドリフトの低減	23) ドリフト低減ノズルを活用し、防除効果を維持する。		
		24) ドリフトの低減ができる散布方法を用いて、防除効果を維持する。	畦畔ノズル等の活用	
		25) 対象病害虫・雑草に応じた薬剤の選定を行う。		
	26) 発生状況に応じて十分な効果が得られる範囲で必要最小限の使用量となる散布方法で実施する。			

I P M実践指標モデル（カンキツ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
	農薬の使用全般	27) 農薬散布を実施する場合には、周辺環境に配慮して実施する。		
		28) 農薬を使用する場合には、抵抗性発達を回避するため特定の成分のみを繰り返し使用しない。		
その他	作業日誌	29) 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。		
	I P M研修会等への参加	30) 県や農業協同組合等が開催するI P M研修会等に参加する。		